

「今、私にできること」

土佐町中学校二年 近藤 詩

「家族に会いたい。」

これは、ひいおじいさんが最後に伝えた
かつた言葉でした。

73年前、第二次世界大戦のさなか、
日本では沖縄で地上戦が行われ、全国
から招集された人たちが、沖縄に住んで
いた人たちの命が多く奪われました。

私は、中学二年生の春、沖縄へ修学旅
行に行つてきました。修学旅行に行く前
に、祖父からひいおじいさんのことについ
て話を聞きました。祖父の話によると、終
戦後にひいおじいさんの戦友が話をしに
来てくれたそうです。

ひいおじいさんは、沖縄の戦地で足にけ
がを負い、ガマにある病院でひめゆりの人
に看病してもらっていました。いつも「家
族に会いたい」と言っていたそうです。

しかし、看護してくださいださっていたひめゆ
り学徒隊に突然解散命令が出され、そ
して、ひいおじいさんは6月18日亡くな
った、と話してくれたそうです。

私も、修学旅行でひいおじいさんが最
後を過ごしていたガマを訪れました。ガマ
は自然につくられた洞窟です。戦争中は
住民の人たちが身を隠したり、兵士や傷
を負った人たちの病院として使われてい
ました。

ガマの中は真つ暗で、足場も悪く滑り
やすいところもあり、懐中電灯の光だけを
頼りに一歩ずつ慎重に歩いていきました。

ガマの中心に着くと、ガイドさんが
「懐中電灯の明かりを消して、暗闇を体
験してもらいます。」と言いました。私た
ちは一列になつて、明かりを消しました。
光ひとつ無いガマは真つ暗で、少し動く
と、どちから来たのか方角も分からなく
なるほどでした。私は、水の音がはつきり
聞こえる暗闇の中で、今までにない気持
ちを味わいました。

それは、皆でいるのに、この世界に私一
人しかいないような、言葉では言い表せな
いような心細さと恐怖、そして不安でし
た。

ひいおじいさんは、この中でどんなこと
を思い、どんな気持ちだったのでしょうか。

再び懐中電灯をつけたとき、そしてガ
マから出て太陽の光を見た時の安心感
は、今でもはつきりと覚えています。

また、今平和に暮らせ、生きていること
がどれほど幸せなのかを改めて感じ、考
えさせられました。

私はこの夏、全国戦没者追悼式に出
席させていただきました。日本武道館は、
全国道場少年剣道大会の試合以来の
2度目ですが、会場の雰囲気はその時と
は全く違っていました。

8月15日は、73回目の終戦記念日
でした。平成最後の追悼式でもあります。
高知県遺族団は、最前列の席で追悼さ
せてもらうことができました。天皇皇后
両陛下や総理大臣も出席されており、
とても緊張しました。

後ろを振り返り周りを見ると、会場は
遺族の人たちで埋め尽くされていました。
戦争によつてたくさんの方々が亡くなり、
その悲しみを抱える遺族の方々がこんな
にたくさんいることを改めて感じました。

私はまだ戦争のことを詳しく知りませ
ん。しかし、修学旅行や戦没者追悼式に
参加させていただいたことによつて、戦争に

ついて今までとは違う見方で考えられるようになりました。

昭和が終わり、平成も終わりを告げようとしています。

戦争を経験した人や、教えてくれる人もいなくなっています。

今、私にできること。

教えてもらったことや、私が経験させていただいたことを、身近な人に伝えること。

ひいおじいさんや、犠牲になったすべての人の礎のうえにある今を、強く生きていくことだと思います。

二度と戦争という過ちを犯すことのないように、そして平和な社会を守るために。

【平和の作文朗読】

平成30年11月に執り行われた高知県戦没者追悼式において、土佐町中学校の近藤詩さんが朗読した平和の作文です。

(高知県遺族会報 平成30年11月号掲載)

